

トヨタ財団  
広報誌[ジョイント]  
October 2019

No.31

【特集】

多文化ニッポンの未来図

トヨタ財団では、この10月より新たな特定課題「外国人材の受け入れと日本社会」の募集を開始いたしました。そこで今号では、移民問題の研究者や定住外国人支援の活動を実践されている方々に、今後の日本社会で予想される問題や必要な対応策について語り合っていました。



おはよう

今朝の目覚めはどうだったでしょうか

一日はね

たった二十四時間しかないんだよ

それをどう過ごしますか

私は、その使い方を

すべてあなたに委ねたいね

信じてるよ

文化庁長官・金工作家

宮田亮平



CONTENTS

FIRST WORD ● 宮田亮平 …… 2

【特集】

多文化ニッポンの未来図

鼎談 ● 岡部みどり × 是川夕 × 横田純洋

横の関係を分断しない  
リエゾンネットワークの構築を …… 5

特別寄稿 ● 田中至紀

共生社会日本の未来に向けて …… 11

山岡義典さんと語る ● 岩井俊宗

わくわくする未来の景色を  
どう提案するか …… 14

国際助成プログラム  
プロジェクト一覧 2019 …… 16

「私」のまなざし ⑤ 鈴木愛

フィールドでの  
思いがけない出会い …… 18

活動地へおじゃまします！

〈台湾・溪洲部落を訪ねて〉 ● 利根菜未

国境や世代を超えてつながる  
住民主体のコミュニティ活動 …… 20

私たちの取り組み ● 平井伸治

日系メキシコ人と共に行う  
歴史調査・保存・伝承の実践 …… 23

お茶っこ通信 第十二回 ● 加賀道

盆踊りをつないでいく  
ためのヒント …… 26

トヨタ財団ジャーナル …… 27

● 理事長着任のご案内

● シンガポールで開催された AVPN コン  
ファレンス 2019 に参加

● 「高校のない町で高校生が学ぶ」鹿児島県  
長島町を訪問等

◎みやた・りょうへい

金工作家。新潟県佐渡に生まれる。  
東京藝術大学の学長を10年務め  
た後、2016年4月より文化庁長官  
に就任。イルカをモチーフとした  
「シュプリング」シリーズなどで  
知られ、2012年には日本芸術院賞  
を受賞している。

※この文章は、文部科学省・文化庁・  
スポーツ庁の全職員に対して、宮田長  
官が省内放送でギターの色をバック  
に働き方改革を呼びかけたものです。

今回、私どもの広報誌 JOINTのFIRST WORD  
として特別にご提供いただきました。

JOINT October 2019  
No.31



Photo by Junya Hidai

鹿児島県の最北西部に位置す  
る長島は、鹿児島本土と橋で  
つながっており、素晴らしい  
眺望が随所にあります。その  
一つになっているのが針尾公  
園。この写真のように雲仙や  
天草地域を一望することができます。この景色を眺めて  
いると都会と同じ時間が、この土地でも流れているのが  
嘘のように感じました。(本誌 P.28参照)

特集

# 多文化ニッポンの未来図

今春、主として介護や建設等の特定分野における労働力を補う観点から、日本政府は今後5年で約34万人の外国人を受け入れる方針を打ち出しました。在留外国人約273万人、そのうち就労者が約146万人という状況のもと、さらなる外国人の受け入れに関して、「受け入れるかどうか」ではなく、「どのように受け入れるか」を議論する方向へ急速に舵が切られたのです。これは日本の社会・経済にとって長期・超長期にわたる大きな変革のはじまりになる――。そうした考えのもと、トヨタ財団では、外国人受け入れをテーマとした特定課題プログラムを新たに立ち上げ、10月から公募することになりました。

助成プログラムを作っていくため、支援の現場や研究者の方にお話をうかがうなかで共通していたのは、外国人を「特別な支援が必要な少数者」として位置づけるのではなく「社会の担い手」として捉え、「本来の力を発揮していく環境づくり」を行うことが重要になること、そして彼らが力を発揮できる社会は、それ以外の人も生き生きと暮らせる社会であるべきだ、という考え方でした。つまり、外国人を共に社会を創っていくメンバーだと捉え直し、彼らのみを取り巻く課題を超えて、より大きな枠組みで課題解決を図ることにより、より良い社会創りが可能になるといっています。

そこで、今号の特集では「多文化ニッポンの未来図」をテーマに、支援の現場や移民・人口問題研究の最前線に立つ方々に鼎談いただくとともに、海外ルーツの子どもたちの支援を取り巻く課題についてご寄稿いただきました。ますます多様化する日本の未来図はどのようなのか――。それは、外国人や海外ルーツの子どもたち、その周辺にいる人々だけではなく、日本社会につながるすべての人にとっての未来図でもあります。



特集  
多文化ニッポンの未来図



鼎談 **横の関係を分断しない  
リエゾンネットワークの構築を**  
是川 夕 × 岡部みどり × 横田能洋

一人ひとりのミクロな理由と  
社会のマクロな影響

**横田** 私は茨城県常総市という外国人比率が8%くらいのところで日系ブラジル人、日系フィリピン人の方々の就学・就職支援を10年くらいしています。トヨタ財団の助成で子どものキャリア支援をやってきて、2年前から多文化保育を始めました。複数の文化の中で子どもの言葉を育てることが難しかったり、教科学習の壁があったり、制度やお金だけでは解決しないこともたくさんあるのですが、それは日本以外でも同様と思うので、そういう情報が国内で活動している方と共有されることで解決の糸口がみつかるかもしれないと思っています。

**岡部** 私はヨーロッパの統合と人の移動の自由化の観点に興味をもって大学で研究を始めました。外務省の専門調査員になる機会を得てルクセンブルクというヨーロッパの統合を積極的に進める国へ行き、実際に労働人口の3割が越境移動者という状況で、多文化共生という言葉を使わなくても生活の中でそれが展開されているのを目の当たりにしてきました。

アジアについては最近関心を持ち始めたのですが、アフリカのような究極的に破綻国家が多い状態でもなく、ヨーロッパのようにある程度確立した人の自由移動が認められているわけでもない中間状態という状態が面白いと思っています。

**是川** 現在、私は国立社会保障人口問題研究

所に勤めています。もともと内閣府に事務系キャリアとして就職したのが初職で、その後、9年間経済財政諮問会議の下で働いていました。私が諮問会議のところで働いていた時期というのは、小泉構造改革の真っただ中で、ちょうど人口減少や移民政策が今につながる形で政策の中で姿を現し始めてきたころでした。当時は、特に移民問題、移民政策に関しては政府内にも市民社会にもほとんど蓄積がないことを痛感しました。でも、それでも政府としてはいったんアジェンダに載ったら、何か決定はしなければならぬわけで、そうしたことを間近に経験する中で人口問題や移民に関する信頼性の高い研究の必要性を感じていました。

また、こうしたことに加え、もともと大学時代に人口、移民問題に興味を持って勉強していて、その後もいざれ研究職に就きたいと思ってコツコツ研究していたこともあり、今の研究所に2012年に転身してから移民研究を専門にしています。今は主に国際人口移動、国と国の間で人が動くというフローの研究と、統計、国勢調査のデータを使ったりして実際の受け入れに当たって何が起きているかを、いわば移民に関する大きな見取り図を描くようなイメージで分析しています。

——多文化共創という観点からみて、今後の考え方を話していただけませんか。

是川 世間で期待されているような少子化を移民で乗り切るといったのは基本的には無理だという結論が国際的にも学術的にも出ています。横田さんは実感されていると思いますが、



●横田能洋(よこた・よしひろ)  
認定NPO法人 茨城NPOセンター・コモンズ代表理事。  
2012年度・2016年度国内助成プログラム助成対象者

一人ひとりミクロな、個別具体的な理由で移動を選択して、日本に来ているのですが、結果として数が多いので、マクロな影響というののももちろんあります。その影響がごんごんと大きくなっていると言えます。

岡部 外国人がどれくらい増えると受け入れ国の経済がどのくらい成長するかという話は実は誰にもわからなくて、政策決定者にもわからないというのが私が調べた結論です。日本の場合、たまたまこのたび外国人材枠拡大について国会で審議しましたが、あれは極めて特殊な例で、ヨーロッパにおいても、おそらくアメリカも国会や議会で事前に審議してまた立法過程を正式に通して受け入れた国はほとんどないと思います。

人の移動と多文化共生あるいは、共創の面で大きな問題を生む可能性があるということ、を当時の人はほとんど気づかずに、もしくは仮に社会摩擦が生じて、すぐに乗り越えら

れるだろうという非常に楽観的な期待のもとで国境の開放が行われました。

横田 母国の経済状況、物価の変動と受け入れ国側の企業の雇用ニーズ、入管制度の組み合わせで動いているように感じています。移動生活者という概念が地域に根付く必要があると常々思っています。

感覚的に言って、10年前のリーマンショックの後では日本で数年働けばブラジルに帰って自分の店が持てたので、帰るのが大前提でした。だからブラジル学校に入れてブラジル人として教育を受けさせるという人がすごく多かったのですが、今はブラジルも物価が上がって日本で数年働いただけでは帰国してもそんなにいい生活ができない、プラス誘拐、銃といった治安の問題があるので、安全な国で子育てがしたいという理由でブラジルに帰りたいという思いはありつつも出稼ぎではないというケースが多い。

そうなるブラジル学校の存在意義が変わらなければいけないのですが、なんとなく公立学校に居づらくなった子が逃げるようになってくる場所になっていたり、生徒が減ったなかで学校自体が成り立っていません。先生の質が低下したり、人数が足りなくなったり。そこを出た子どもたちが日本でキャリアを作ることができるといって、公立高校にも行っていないし、非常に厳しいわけです。

### 異なる出自を持った人が 一緒に暮らすためのルール

是川 今、お話を伺っていて思い出したので

すが、最近、日系人の研究をしている研究者に聞いてなるほどと思ったのは、移民研究だと連鎖移民、チェーンマイグレーションという考え方が主流で、日本でも90年代に外国の人が増えたときに連鎖移民が始まるのではといわれていました。けれども、その時は新規で来る人が多かったのですが、それから四半世紀経って、最近家族移民という形が入ってくる人が大きく増えてきていて、ようやくチェーンマイグレーションの段階に入っているのではないかということです。確かに一見、以前と同じような人たちに見えてもその移住のステップとしては大きく変化しているといえます。

国籍の部分は職業選択に影響しないのでしょうか？ 場合によっては日本国籍の方が選択が広がるというケースも聞いたことがあります。



●岡部みどり(おかべ・みどり)  
上智大学 法学部 国際関係学学科教授。主な著書・編書に『人の国際移動とEU: 地域統合は「国境」をどのように変えるのか?』(法律文化社)、『グローバル・ガヴァナンス論』(法律文化社)などがある

横田 職種上、公務員には日本国籍でないと行けないというのが一つありますが、会社として国籍を見ているというのは、昔の特別永住の方々にしても採用差別的なことが残っている可能性もありますね。

是川 日系人に関しては日本国籍がないとダメだと言われたようなケースは？

横田 それよりは日本語能力の方がより重視されていると思います。読み書きができないと介護現場などでは引き継ぎができなかったりするのです。

岡部 中国の方はほかの国の方に比べて日本に帰化する割合が多い印象があります。その傾向は日本だけではなく他の国に対してもそうで、たとえばイギリス人になる中国人も多い。

是川 私が今やっている調査でも日本国籍取得の意向を聞いているのですが、今後の日本定住の意向が強い人ほど帰化思考が強いかなというところな感じがします。逆にすぐ帰るとか別の国に行きたいという人がパスポートの関係で、たとえば日本国籍があった方が便利だからという風に答えていたりとか。

国籍というところでもアイデンティティの観点でとらえがちですが、意外ともっと現実的な道具として国籍をとらえている人も多くて、ずっと住みたいと思っている人は永住資格で十分だと思っていたりするんだと気づかされました。むしろ、すぐ母国に帰る人とかあちこち行く人の方がいつでも日本に戻ってこられるようにパスポートを取っておきた



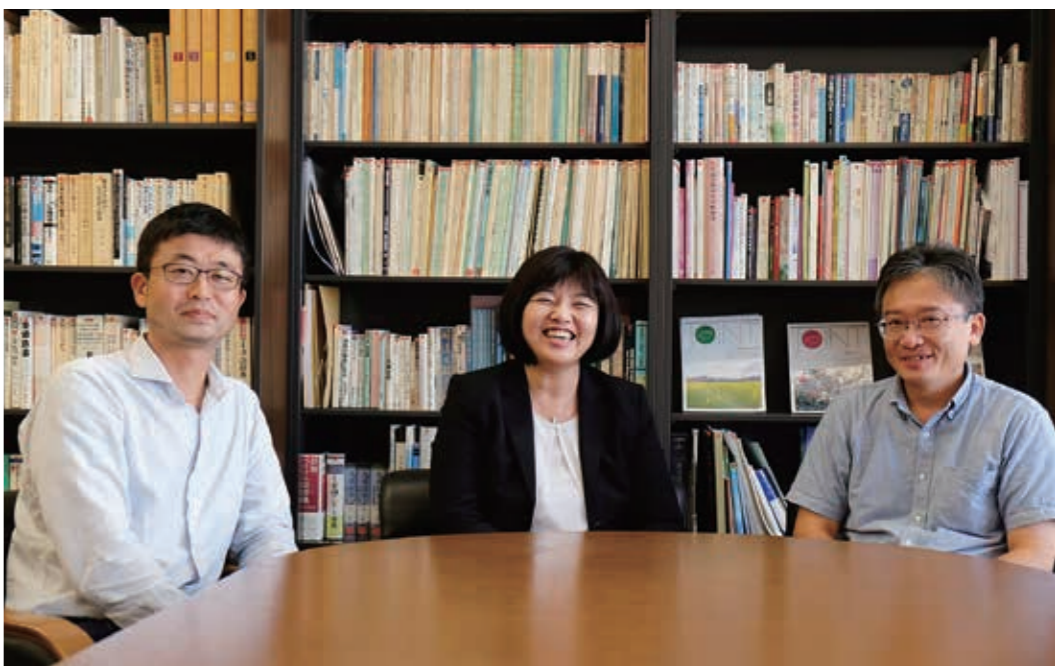
●是川タ(これかわ・ゆう)  
国立社会保障・人口問題研究所 人口動向研究部第三室長。主な著書・編書に『移民受け入れと社会的統合のリアリティ』(勁草書房)、『人口問題と移民』(明石書店)などがある

いと考えるケースもあるみたいで、そこはちゃんと調べてみないと分からないです。

——実務的に便利な方を選択するという場合と、自分のアイデンティティ、自分が何系であるということ、周りからカテゴライズされること、その辺のギャップはどうなんだろうか。

是川 日本はグループごとに属性が決まっています、グループごとに政策や対応を決める傾向がほかの国より強いという印象です。日本の場合が多文化共生という言葉が流通したことも関係するの、受け入れの単位が個人ではなく文化とか集団と大きい。人によっては、出自はそうなんだけど実はそういうアイデンティティがあるとは思っていないという人もたくさんいるし、積極的にそういうエスニシティを選択したいという人もいて、その辺は個人によってまちまちなのだと思います。

横田 フイリピンやタイから日本人配偶者と



男性とフィリピンの女性みたいな家族が増えてるんです。家の中で英語とタガログ語とポルトガル語が飛び交うのが普通になって、連れ子同士の共通言語は日本語みたいになったりして、家族はなに人ですと説明できないような、いろんなルーツの人で構成されている家族が出てきています。

**岡部** 私はたまたま身近にそういうケースを知っているのですが、それだけではなくて同じ国籍であっても二世代、三世代、四世代で感覚も違ってくると思うんですね。なので多文化共生とか共創という話をするときに、究極的に問題になるのはどこまでを集団としてとらえるかということだと思います。個人は一人ひとり違った属性を持っていて、それを一つにまとめるというのは現実には無理だということになると思うので、何らかの便宜的な観点から集団というものを作って、その集団間の関係を築いていく必要がある。しかし、それはそれで漏れてしまう人も出てくることになりますよね。

**是川** しかも、ただなに人の集団かという発想より、異なる出自を持った人が一緒に暮らすという、もう少し抽象度が一段高いところでのルールというかやり方を考えないといけないんじゃないかという問題が生じる。片方は来るんだからその国の言葉を勉強するのは当然でしょという声と、我々は日本人じゃないのという声があつた。ドイツの例も問題がなかったわけではなく、ドイツの結果トルコの人がある。トルコ語を話せなくなっているという事実はない。ご承知のようにトルコ語の学校に対する補助もあるからです。両方やっているという意味ではかなり進んでいると思います。

常者に合わせましようというのではなくて、この人にこれだけの配慮をして活躍してもらいましょうというような概念を外国の方に聞かせることもあてはめれば、もっと活躍できますよなってなっていくと思います。

——ヨーロッパのどこの国では移民を受け入れる際、かなりの時間、言葉やルールを教えるから現場に入ってもらいますよね。それは政策的には成果を上げていますか？

**岡部** ドイツやスイスなど、ドイツ語圏ですね。私は効果はあると思います。スイスは、日本から駐在で行く人も移民で行く人も同じ一律で語学研修を受けることができます。できないと就労させないという罰則規定ではなく、最低限生活に必要でしょうということだけで一律に提供されるので、かなり効果があると思います。

**横田** そういう制度をうまく取り入れたらいいと思います。日本に子ども連れできて、二日目に教育委員会に行つて子どもの学校の手続きをして、三日目に工場のラインに立つてあとはひたすら働くみたいな形で5年とか経つてしまふんです。日本以外から来た場合にはこういう研修に企業も協力して受け入れていただくというのがあると、日本のことが分かった状態で自分の可能性を広げていけるので、ぜひ他の国の制度のいいところは取り入れていければいいのかなと思います。

## 人との出会いが 生き方を変えていく

**岡部** たとえばイギリスやアメリカといった

ない。なに人への対応といった個別具体的な対応ばかりではきりがありません。また、日本がこれから進む社会の方向を考えると、今までは、移民/外国人をとらえる際、社会問題としてとらえるということが多かったと思うのですが、これはもう特殊な問題ではなくて、ノーマルな、つまり常態になってるので、問題という切り口では把握しきれないと思うんですね。

**横田** 私は障がい福祉関係にかかわったことがあって、障がいのある方の話と外国ルーツの方の話を重ねて考えたことがあるのですが、ユニバーサルサービスやユニバーサルデザインが障がいの関連で入ってきたときに、視覚障がい者のためのものというだけではなく、目が見える人も見えない人も両方使えるものを作ろうと変わってきたし、その発想でいえばブラジル人、韓国人、日本人、目が見えない人、いろんな人に伝わりやすい情報メディアと考えられるし、学校教育で予算拡大が難しいなかで日本語支援体制がどうしても一部の学校にしか行かないことも、一方で障がい分野でいうと、障がいがあっても普通学校に行つた場合に補助員がつくくらいになつていて、それの上に乗せたほうが対応しやすい面も実際にある。日本語が不自由な人というより、特別な配慮が必要な人、こういう支援があれば学校でやっていけるというふうなくりで見えていったほうが早いのではと教育委員会の人も話をしています。障がい分野がぐつと進んだのは「合理的配慮」というキーワード。日本人に合わせましようとか健

することが難しいんです。まだ日本が多文化に開かれていない社会環境だった時代、日本語ができなければ生活ができないという非常に厳しい環境で育つた外国出身の方は、外国人が日本文化になじまなくてもよいような「ケア」が必要なのか、とおっしゃる。ちょっと厳しいスパルタ的な環境がいいのか、ある程度母語を話す状況も許されるのがいいのかというのは難しく、当の外国人の間でもコンセンサスが取れていない状況だと思えます。いずれにせよ、生活者としての外国人と日本人の協力関係が必要だと思つていますが、成功事例はありますか。

**横田** どうしても製造業、派遣労働のように職種が限られがちなのですが、頑張つて看護師みたいな国家資格を取つて活躍する人もできています。本人はもちろん家族や学校もかなり協力して達成できているので、そういう意味では可能性がないわけではないのです。こういう仕事に就きたいと若い時にどれだけ思えるか、手本になる大人と接することができるとかどうかにすごく意味があります。同世代の話の聞いたりするなかで人生が大きく変わる、制度があつてもなくても人との出会いが一人ひとりの生き方を変えたいと思えます。こういう壁があつたという話を聞いて、その壁を壊していくことが大事ですね。

## 気持ちや考え方の通訳を 果たせる人の活躍が重要

**是川** 今まではわりと日本の移民社会としての未来についての展望は暗いといわれること

特別寄稿

# 共生社会日本の未来に向けて

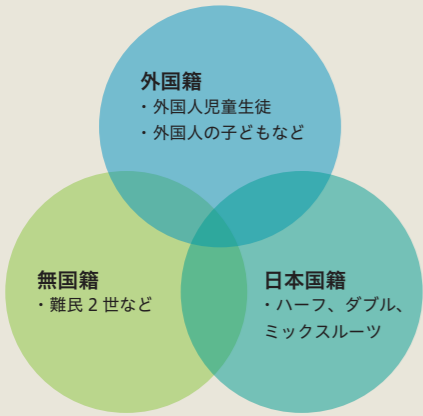
## 海外ルーツの子ども支援の現場から見えてきた現状と課題

特定非営利活動法人青少年自立援助センター 定住外国人支援事業部統括コーディネーター ● 田中宝紀

### 往復4時間の道のり通う子ども

「海外にルーツを持つ子ども」とは、両親またはそのどちらか一方が外国出身者である子どものことで、外国籍の子どもたちだけでなく、いわゆる「ハーフ」、「ダブル」等と呼ばれる日本国籍(場合によっては二重国籍)の子どものや難民2世や無国籍状態にある子どもたちなどが含まれています。

筆者が運営するYSCGグローバル・スクール(以下、YSCGS)は2010年より、こう



■ 海外にルーツを持つ子どもとは(国籍に関わらず、両親またはそのどちらか一方が外国出身者である子ども)

が多かったと思うのですが、国勢調査のデータなどを使ってとても丁寧にみると、全体としては緩やかに社会的統合が進んでいるのではないかとすることに最近、気づきました。もちろん学歴や個人属性によって大きく違うのですが、一人ひとりミクロに見てそれを平均すると、うっすらとひとつの像が見えてきています。カギになる要因が少しずつ見えてくるのです。

その場合、世代にかかわらず共通しているのは、日本型雇用もしくはグローバルゼーションとどういった距離感、どういう位置関係にあるかで決まってくるということです。外国人であっても日本型雇用の中に入れば会社の中で年功序列に従って昇進していくので、実は日本人とあまり変わらない生活を送れる。言語や文化の違いはあるにせよ、そういう問題がある意味、お金でカバーできる生活を送れる。あるいは第二世代の子でもうまく高校から大学に進学できて、大学を出て就職するときに、自分のルーツがある国と日本の経済関係が強くてそれを扱う会社に就職できたりすると、引く手あまたになったりするようです。でも一方でそれに加えて乗れなくて日本型雇用の外部、周縁の部分に入ってしまうと、日系人の多くがそうですが、日本と南米諸国の経済的な結びつきもあり強くないし、かつ日本型雇用という意味でも正規職員になっていないので周縁化されてしまう。

でも一方でフィリピン系の子たちに関する研究成果などを見ていると、大学に進学でき

てそこからフィリピンと取引関係がある会社に入れたりすると対フィリピンビジネスのリエゾンになって、フィリピンに日本企業の駐在員で行ったりすることもできる。日本型雇用とグローバルゼーションに対してどう位置づけられるかで、さまざまな研究結果を見て大人も子どもも運命が変わってきているという印象をもちます。大卒の資格を持っているとどちらかに乗りやすいけれど、学歴が低いと同じ国籍でも難しくなっている。その辺の要因が日本でも重要になってきていると感じています。

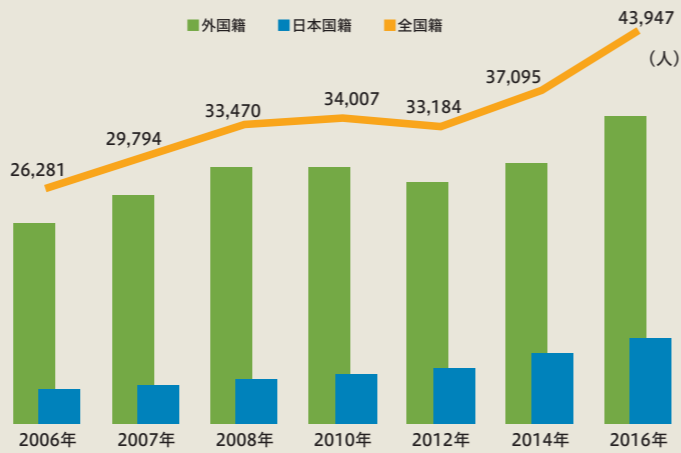
岡部 一番問題なのは、グローバルゼーションの結果勝てなかった人たちは日本人の中にも多くいて、そういった人たちに對して政府がどう対応するかということ。そして、日本人と同じようなロジックで、外国人に對しても再分配政策を行うかどうかこれから先問題になってきます。

是川 移民を受け入れるとすぐさまアンダークラスができるという人がいますが、さまざまな研究を見ていると、移民がどういった階層に位置づけられるかは受け入れ社会がもともと持っている格差構造に強く影響されているということがわかります。つまり日本は移民を受け入れたとしても、アメリカみたいな格差社会に一足飛びになるというのはないといえます。よって、移民のせいでアンダークラスができるというのは、一部の人が喧伝するほど私は悲観的には思っていない。日本がもともと持っている社会の状況から丁寧に見ていかなければならないことだと考えてい

ます。

横田 経済的な成功、キャリアを作るという意味では、やはり複数語を使えるというところで、ブラジル学校も英語とポルトガル語を身につけさせて、二国間で活躍できる人材を生み出していこうとしているのは一つのチャンスだと思います。外国の人はサービスを使うばかりで、対価を払わないから全体的に抑制するというようなステレオタイプに行政はなりがちです。そういうときに、市民社会レベルでもピアサポーターみたいな人を養成して、当事者にこういう義務を果たそうとか、市役所に対してちゃんと言っている人もいるんだからこういう情報提供はすべきだと言える人たちが必要。日本で暮らしてきてある程度話せる人だったら、言葉の通訳だけでなく、気持ちや考え方の通訳を果たせる人がもつというんな場所で活躍できるようにすると、その存在意義がわかってくると思います。そんな代弁したりリーダー的なことのできる人を育てていくのは重要じゃないかなと思います。

岡部 一番大切なのは、社会が分断されないことだと思います。閉鎖的な空間ができあがってしまったら、外国人の集団が特殊だという認識が日本人の間で高まってしまつと、相互協力関係は築きにくい。横の関係を重視して、女性・子どもなどの国籍別ということではなく、別の集団的属性を重視したネットワークを作ること大切だと思います。



■ 日本語指導が必要な児童生徒数の推移  
※文部科学省「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査(平成28年度)」の結果についてより筆者作成

した海外にルーツを持つ子どもたちを対象として、専門家による教育機会を提供している全国的にも珍しい取り組みです。YSCGSの対象となるのは、海外にルーツを持つ6才から30代で、これまでにおよそ750名、35以上の国と地域にルーツを持つ子どもたちを受け入れてきました。月曜日から金曜日まで年間200日以上開講され、異なるニーズを抱えた子どもたちが朝から晩まで、入れ替わり立ち替わりやってきては日本語を学んだり、学校の勉強のサポートを受けています。

東京都の西側、福生市という小さな自治体に拠点を構えています。東京都23区外(市町村部)全域から子どもたちが集まってきました。さらには隣接する埼玉県や神奈川県、千葉県など電車を乗り継いで、往復4時間以上かかる地域から通ってくる子どもたちもおり、彼らに対する支援の不十分さを思い知らされます。

### 1万人以上の子どもが「無支援状態」に

文部科学省が2年に1度実施している「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査」によると、2016年の時点で全国の公立の小、中、高校、中等教育学校、特別支援学校に在籍する日本語がわからない状態の子どもたちは43,947人。この10年で約1.7倍に増加しました。

日本語指導が必要な児童生徒の在籍数別に学校を見ると、日本語がわからない子どもが5人以上在籍する学校は全体の4分の1に留まる一方、半数以上が「その学校に、そうした子どもが1人または2人しかいない」という、少数在籍校があることがわかります。こうした学校は、地域自体に外国人住民の少ない「外国人散在地域」にあり、小規模自治体であることも少なくありません。

小さな自治体の中では、たった1人しかい



多様な仲間と共に学ぶ場には笑顔がたえない

約44000人の内、25%は学校で何の支援も受けていない「無支援」となっています。日本語がわからない子どもがただ教室に座っているだけ、といった放置状態となってしまうような状況も見受けられます。友だちもできずに孤立し、最終的には学校に通うことを諦めてしまう子どもも目立ち、危機感が募ります。

### 「相談の先」を担うのは誰か

海外にルーツを持つ子どもに限らず、外国人の支援機会や受け入れ体制整備の状況は地域間、自治体間による格差が大きいことが積年の課題となっています。自治体窓口での多言語対応や相談体制の有無、病院における医療通訳配置や教育、子育て、福祉サポートへのアクセスなど、安心して生活できる体制が整っている自治体はごく限られているのが現状です。

2018年末に開催された臨時国会では、

ない日本語指導が必要な子どもをサポートするために、日本語を教える人を探すことも、そのための予算を用意することも難しいのが現状です。その結果、日本語指導が必要な子どもたち

外国人受け入れの体制整備は不十分であり、それは政府が自治体にその対応を「丸投げ」してきたからであるといった批判が噴出し、また、まさに、地域による支援機会等の格差はこのことに起因し、拡大し続けてきたものと言えます。

長らく政策不在であった外国人の受け入れ対応は、2019年4月から始まった「外国人材受け入れ・共生のための総合対応策」に基づいて、ようやくその一歩を踏み出したところです。その目玉の一つが、全国100箇所を設置を予定し、多言語で外国人の生活の困りごとなどを一元的に受け付ける「多文化共生総合相談ワンストップセンター」事業です。入国管理庁によると、このセンターは「適切な情報提供を行うとともに、必要に応じて関係機関への取次ぎを多言語で行う」と定義されており、(出典：入国管理庁「外国人受入環境整備交付金Q&A」<http://www.npi.go.jp/content/001304717.pdf>)日本語力がじゅうぶんでない外国人にとって、まずはこのセンターにさえ問い合わせれば、多言語で対応してくれるという環境の実現は、生活に大きな安心感をもたらすものと言えます。

一方で、現時点で同時に考えておかねばならないのは、この「相談の先」がどうなっているか、それを担うのは誰であるか、ということ。

たとえば「自分の子どもが、日本語がわからず、学校で困っている」というような教育相談を外国人保護者がセンターに寄せたとしても、その「相談の先」である学校や地域で

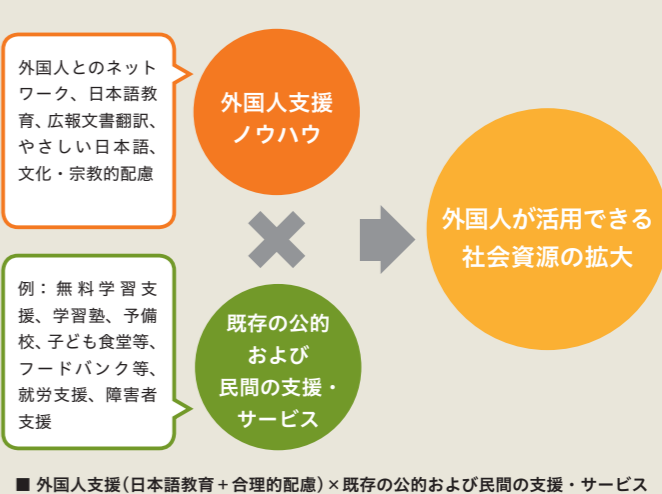
常の交流手段としても有効です。もちろん、日本に生活する外国人や海外にルーツを持つ子どもたちの日本語教育機会の拡充の重要性はいうまでもありませんが、日本人側も日本語を母語としない方々が理解しやすい日本語を使うことで、よりスムーズで、相互にストレスの小さいコミュニケーションの実現につながります。「やさしい日本語」は、今後、共生社会の共通語として発展してゆく可能性を大いに秘めています。

**日本語ができて超えられないもの**

一方で、問題は言葉だけにとどまりません。日本語をがんばって習得した子どもや、日本で生まれ育ち日本語しか話せない海外ルーツの子どもたちであっても、肌や瞳の色が異なること、保護者が外国人であることや、名前が日本風でないことなどを理由としたいじめや差別(レイシャル・ハラスメント)を受けることは珍しくありません。

いくら「受け入れ体制」を整え、外国人が日本社会に「適応」できるよう支援したところで、このような「心の壁」が立ちはだかつていては、いつまでも多様な人々が共に生きる共生社会の実現には至りません。外国人受け入れが、日本社会にとって避けられないことであるならば、受け入れ側である私たちにも、彼らと共に生きてゆくための変化が求められています。

「ダイバーシティイズ」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。たとえば女の子が手に取るような人形は、8頭身のスラリとし



外国人支援(日本語教育+合理的配慮)×既存の公的および民間の支援・サービス

対応できる体制がなければ、問題は先送り、あるいはたらいまわしにされるのではないかと、といった懸念が残ります。

このため、相談窓口の拡充と同様の優先度とスピード感を持って、その相談の先となる関係諸機関の対応能力を上げていく必要がありますが、外国人支援のための人材も予算もない地域が少なくないなかで、どのようにそれを実現してゆくかには工夫が必要です。

筆者は、基本的には「外国人を専門に対応する機関創出や人材育成」には人的にも予算的にも限界があると考えています。この前提に立ち、現実的に外国人が活用可能な社会的資源を拡充してゆくのであれば、目指すべきは「既存の支援または社会的サービスの、外

た体形で、肌は白く、瞳が大きくその色は薄いとといった、白人女性モデルとなるものが身近です。しかし、子どもたちがこうした人形から受け取るメッセージは、特定の人種を「美」として提示しており、自らを投影するには無理が生じる場合や、受け取るメッセージに偏りが見られる場合があります。

ダイバーシティイズでは、たとえば、少しよくかな体形の人形やアジア人をモデルとした人形、車いすに乗った人形などの他、こげ茶色、赤茶、薄たいだい色といった「肌色」ばかりを集めたクレヨンなど、私たちの身近にも反映させた商品が開発されています。これらのおもちゃを通して、子どもたちが自分や周囲の多様性に対する感性を磨き、多様性を当たり前として受容する力を育むことができるのではないかと、その取り組みに注目が集まっています。

### 次世代に必要な力を、今こそ育みたい

ダイバーシティイズは時間のかかる、さやかな試みに見えるかもしれませんが、しかし、現代の子どもたちが大人になる頃には、多様な人々の存在を受け止められるマインドや、異なる価値観と折り合い「コミュニケーション」してゆく力、共生社会であるからこそ、そのマナーや振る舞いなど、今の大人たちとは異なるスキルがより強く求められるようになっていくでしょう。その力を次世代に育んでゆけるかどうかは、今の大人たちの踏み出す一歩にかかっているのではないのでしょうか。



YSCGS日本語初級クラスの様子

そのノウハウの一つとして現在注目されているのが、「やさしい日本語」という考え方で「やさしい日本語」は、阪神・淡路大震災の際に日本語も英語もじゅうぶんに理解できない人々が、適切な避難行動がとれなかったなどの反省から生まれました。たとえば「高台に避難してください」という一文は、「高台」と「避難」という日常的でない単語を入れ替え、「高いところに逃げてください」とします。防災に限らず、生活のあらゆる場面で使う

ことができる「やさしい日本語」は、前述の「日本人を主に対象とした既存の支援」の担い手にとっても、外国人対応の基本スキルとなるものであり、また、もつと身近な地域で共に暮らす人同士の日



### 山岡義典さんと語る・岩井俊宗

## わくわくする未来の景色を どう提案するか

個性や考えに違いがあってもみんなと一緒に居たくなる、そんなNPOづくりを目指す——。地元の栃木県で社会貢献活動を進める岩井俊宗さんに、その活動にける思いを語ってもらった。



● 山岡義典(やまおか・よしのり) 特定非営利活動法人市民社会創造ファン  
ド理事長、助成財団センター理事長、日本NPOセンター顧問などを務める

と、プロジェクトを提案して終わりではなく、そのプロジェクトを会社が実行するとき社長が右腕になったり、一緒に未来を作る動きをする若者を募集します。自分の力を試したい、将来社会の問題を解決するために力をつけたいという意欲的な若者たちが手を挙げてくれるようになってきましたので、そのコーディネーターになり、最終的に目指すところまで伴走していくのが我々の実践型インターンシップです。

また、若者の中にこんな風にしたらこんな人が喜んでくれるかもというアイデアがありながらも動きだせない人がいる。その人たち約6か月伴走しながらアイデアを形にしていけることを支える、何かを始めるといことを応援する「アイデアネクスト」というプログラムもやっています。

**山岡** 10年間でこのインターンを経験した人が何百人にもなりますね。

**岩井** そうですね。今も大学と提携する形で実践型インターンシップをやっています。若者に特化しているという自覚はあるのですが、いろいろなパートナーと事業をしていくというのが、この10年でだいぶ確立できたかなと思っています。行政、大学、民間企業からもプログラムを作ってほしい、運営してほしいというオーダーをいただいている、それが主な収益になっています。

**山岡** 企業、大学、行政がお互いに結びつくチャンスを提供してサポートしているのですね。

**岩井** コーディネート機関としての仕事が一

”若者の力を活かした地域の活性化

**山岡** 岩井さんは「とちぎユースサポーターズネットワーク」の代表をされていますが、まずその活動について教えてもらえますか。

**岩井** 我々が掲げているミッションは、若者の力を活かして地域の活性化、課題解決を加速することなのですが、具体的には実践型インターンシップというのを手掛けていま

番かなと思っています。いろいろな課題や思いを持っている人たちが重ねていくとハッピーなものが生まれてきます。その変化の触媒としての役割を担っていきたくて考えているのです。チームのスタッフも海外経験者が多いです。他の人と違っていい、違うって面白いという考えが根底にあって、そのことが心地よく思える若者たちが来てくれてるんだらうなという気がします。

友達といるときなどは同調性が重視されるという傾向もありますが、もう一方では他と違う自分、自分のスピードで生きたいというときに、変わってるといわれることが怖くない空間として10年やってきました。それが若者からの必要性の一つとして応えられているとすると、本気になれる空間、違いが怖くないという部分を、若者たちに対して提供できているのかなと思います。

”違いを認め合い、楽しく活動する

**山岡** ブログを見ましたが、古い建物をつ



● 岩井俊宗(いわい・としむね)  
NPO法人 とちぎユースサポーターズネットワーク 代表理事。NPO法人宇都宮まちづくり市民工房理事、栃木県社会貢献活動推進懇談会委員、栃木県協働アドバイザー、一般社団法人とちぎニュービジネス協会理事等も務める

かつて若者たちと一緒に何かやっていたいんですね。

**岩井** 古い建物をつかうという案件は二つあって、一つは卒業生の取り組みで「えんがお」というチームがやっています。「みんなのいえ」という、一階にはお年寄りが集まる場、2階が高校生の勉強部屋になっているみたいな地域の居場所を大田原市に作りました。今、2棟目を作っています。

もう一つは実は我々の事務所を引っ越すという動きで、宇都宮市内のお寺と連携してやっています。お寺の現状は檀家さんだけが集うサロンになっているのですが、地域に深い安心と信頼を与えられるように、今一度そういった本来のお寺の在り方を取り戻したいということ、一緒にさせていたくことになりました。新しい拠点の名前は「Aren」といいます。お「寺」のローマ字表記(HERA)を逆から読んだものなのですが、現状を足元からひっくり返そう、今あるものを違う角度から見ようという意味を込めています。コミュニティスペースというだけではなくて、もっと対話と議論ができる場が増えたらいいなと思っています。

**山岡** これからどういうことをしていきたいですか。違いを認め合うというのが全体のキーワードになるかもしれませんね。

**岩井** どこからその問題を見るかという視点をいっぱい持っていないと、社会の問題が立体的に立ち上がってこない。物事をより深く多様に見ていくというプロセスがどんどん重要になってきていると思います。ただ悩まし

いのは、一人ひとりが未来を作る主人公でありたいとは思っているのですが、見方や考え方の違いに対して自信が持てるようになるには対象物をちゃんととらえる力が必要です。いろんな役割があつて、それを認められるかどうかというところに揺るがない自分があるか。自分が揺らいでしまうことが怖くなってしまくと、人の意見を聞けなくなってしまう。

**山岡** 常々言っていることですが、20年前にNPO法を作ったときには、NPOって楽しいものだと思っていたけれど、だんだんそうじゃなくなってきた。でも本誌JOINTで対談させてもらう若い人たちは、面白いこと、楽しいことをとても大切にしているという印象が強いですね。NPO活動そのものが楽しく充実するためにも、支援組織は特に楽しくあつてほしいものです。

**岩井** 今日お話しさせていただきながら、わくわくする未来の景色をどう提案できるかというのが大切なと感じました。一緒にいたくなる楽しい空間であることがNPOにとって重要だと思っていて、明るいところに人は集まるといふメカニズムがあるような気がしています。今現在楽しいというだけではなく、明日はもっとここを楽しくしようねというところをお互い感じられる、わくわくする未来の景色を提案できるようにしたい。

人と違っても自分を受け止めてくれる安心感、温かさ、嬉しいに近い感覚、ポジティブな気持ちになれるというのが「楽しい」という言葉の中に全部入っているような気がします。



# 国際助成プログラム プロジェクト一覧 2019

2019年度に採択された国際助成プログラム9件のプロジェクト一覧です。

\*地図上の数字は、各プロジェクトの主な活動地域を示しています。

\*各プロジェクトの詳細についてはトヨタ財団ウェブサイトをご覧ください。

番号	代表者氏名	題 目	主な活動地域
領域A. 異なる国籍や文化的背景を持つ多様な人々が共に暮らす社会			
①	針間 礼子	日本への公平な移住労働の促進に向けた送り出し国のキャパシティの強化	ミャンマー、カンボジア、日本
②	毛受 敏浩	越境的移動における情報保障の社会基盤 —— 公正で安定した移住の実現に向けて	日本、韓国、ネパール、ミャンマー
③	米野 みちよ	アジアの高齢化と人の移動を展望し活力を生み出す起業、政策提言、研究 —— フィリピン、インドネシア、ベトナムのEPA看護師らの交流	フィリピン、インドネシア、ベトナム
領域B. オープン領域			
④	柴山 守	東南アジア大陸部の古代遺跡・治水術から学ぶ地域適型水資源管理システムの実現	タイ、ミャンマー、カンボジア
⑤	藤本 穰彦	食べたもので食べるものをつくる —— ベトナム・メコンデルタと九州の中山間地域で学びあう再生バイオマスの地域内循環と農業再生	ベトナム、日本
⑥	吉川 成美	海洋プラスチック汚染に対する課題解決型エコツーリズムと市民プラットフォーム型モニタリングシステムの構築	日本、タイ、ベトナム
⑦	池内 稚利	平和で豊かな暮らしのために「法」をもっと身近に —— 正義へのアクセスを実現するための4か国の連携	ベトナム、カンボジア、ラオス
⑧	久米澤 咲季	幹部人財の交流を通じた国境を超えるソリューションの移転 —— 日本とベトナムのソーシャルセクターから	日本、ベトナム
⑨	友廣 裕一	デザイナー滞在型事業を通じた地域の中間プレイヤー育成と国やセクターを超えた学び合いのプラットフォーム創出	インドネシア、カンボジア



フィールドで考えていたこと」とは何か、フィールドノートを見直してみたが、朝起きてから夜寝るまで、頭の中は「スナドリネコ」に占拠されている。でも、だからこそ、身の周りで起きるすべてのことがスナドリネコにつながり、いわゆるセレンディピティといわれる思いがけない出会いとなるのかもしれない。

スナドリネコは英名「Fishing cat」、和名「漁(すな)り猫」と名前が示すように魚を捕食し、湿地に生息する小型のネコである。ネコ科の多くの種とは異なり、水かきがあり、爪を完全に引っ込めることができない(魚をひっかけやすくするためなど諸説ある)。ちよつと足が短く、頭が大きく、なんとなくずんぐりとしている。美しいと形容するべきか少々迷うが、水陸両用のスパーキヤットであり、非常に魅力的なネコである。しかし、このスナドリネコは残念ながら絶滅の危機にある。森林減少はよく知られるところだが、スナドリネコが好むとされる湿地はその3倍もの速さで消失していると報告されている。彼らの生息地は地球上から消えつつある。

**国** 土のほとんどがデルタ地帯である Bangladesh の湿地も例外ではない。さらに、日本より多くの人口を北海道の2倍弱の面積に抱えるこの国では、人との共存も課題である。研究対象地域であるシレット州ハカルキハオール地域は国内最大級の内陸湿地で、生態的な危機にある地域(Ecologically Critical Area)と認定されており、湿地林の再生、持続可能な漁業の推進、渡り鳥の保全

除の対象として認識されている。助成を受けた研究ではここでのスナドリネコの保全を最終目的としているが、目下の課題は人間によるスナドリネコの捕殺を抑えることにある。スナドリネコが何を食べていて、湿地のどこを利用していいのかを調べながら、村では人々にスナドリネコに対する認識を質問して回る。そんな時、村の女性から全く関係ない質問を受け、発想を転換することができた。

**なぜ、家にいないで、こんなところで仕事をしているの？」**彼女は、調査チームに数名の女性がいることを不思議に思っていたようだ。Bangladesh では野生動物のフィールド調査を女性が行うにはさまざまな社会的制約がある。

そもそも、調査チームのアシスタントの女性も、最初はできないと考えたらしい。しかし、彼女は元指導教官から「日本から女性筆者のこと」が一人で来て調査を始めるのに、なぜあなたができないと考えるのだ。できないと思うから不可能になる」と励まされ、参加を決めたそう。なお、誤解のないように言うと、Bangladesh は女性が首相で、大学や企業の中でも、責任のあるポジションにつく女性を日本より多く見かける。しかし、これらは森林や湿地をうるつく仕事ではない。また、調査地域のシレット州は比較的保守的な地域でもあり、街のマーケットでも女性の姿を見ることはほぼない。その村に入るスナドリネコの調査チームに女性が数名いるのだから、村の女性たちは興味津々で集まってくる。

「私」のまなざし 25

## フィールドでの 思いがけない出会い

文・写真 ● 鈴木 愛

首都大学東京 都市環境科学研究科



カメラトラップで撮影されたスナドリネコ。この場所は翌年には伐採されていた



湿地周辺の村で典型的な家禽小屋



眼球が出るまで殴られ、殺された授乳中のスナドリネコ。仔ネコの運命は絶望的



緊張の初インタビュー。この2年後には自らメディアと交渉するようになる

が行われている。観光客を連れてくる渡り鳥や、重要なタンパク源である魚の保全は重要だと認識する村人も多い。しかし、スナドリネコとなれば、話は別である。世界では絶滅危惧種であつても、ここではどこにでもいる動物であり、家禽を襲うスナドリネコは害獣にすぎない。

**村** 人の多くはスナドリネコを見つけ次第、殺すと言う。ハカルキハオール周辺はBangladeshの中でも経済事情があまりよくない。大きな漁場は外部の富裕層・権力者が独占し、地域の人がアクセスできる場所は限られている。農業を取り巻く環境も過酷であり、失業率も高い。さらに、この湿地の周辺では毎年洪水被害を受け、家を建て直す世帯も多い。研究地域の約60%の世帯は月収が約2万円以下であり、この中で大体1羽200円前後のニワトリやアヒルの損失は大きな痛手である。住民の気持ちを理解できるというとおこがましいが、村にいれば少なくとも想像できるようにはなる。NGOからも政府からも支援が満足に届かず、自然災害にあおうが、家禽を喪失しようが、家計が火の車になろうが、誰かが責任を負ってくれるわけでも補償してくれるわけでもない。その中で、さらに生計に損害をもたらすスナドリネコが絶滅危惧種だろうが関係ない。NGOや政府が押し付けてくる保全に反感を持つことはあれ、支持する理由などないだろう。

**村** この状況はスナドリネコにとって四面楚歌だ。生息地が消えつつあり、その湿地の周りに居住する20万人以上の人々の大半からは駆除の女性から次々に投げられる質問に最初は戸惑っていた女性のアシスタントも、今では堂々と答える。「湿地の生態系は生活を守ってくれるものであり、子どもたちが将来、魚を食べ続けられるようにするためにも、村を水害から守る湿地林の維持のためにも、今、動く必要があるのだ」と。それを聞く10代前半で結婚した村の女の子の真剣なまなざしを見て、女性のアシスタントが村で発信しているものは言葉だけではないことに気づいた。彼女たちの存在そのものが、さまざまな社会的制約を乗り越えてまで挑むほど、野生動物を保全することは重要だと伝えている。スナドリネコの生態系での役割やどんなデータよりもはるかに強いメッセージとなつて村の女性に届いている。ここが突破口だと思つた。

スナドリネコの保全における「女性」というキーワードなんて想像すらしていなかったけれど、ここから始めていけばいい。心強いことに今年から2名の女性のアシスタントが日本に留学し、スナドリネコと人との軋轢に関する研究で学位取得に挑戦する。さらに、先輩たちをみて、それに続く女性の院生も出てきた。地域でも彼女たちに触発され、スナドリネコの保全に興味を持つ若者が出てきた。こういう予想外のことが起こるからフィールドワークは楽しくてやめられない。

●鈴木愛(首都大学東京都市環境科学研究科) 2016年度研究助成プログラム「Bangladesh 北部の湿地におけるスナドリネコと人との軋轢に関する研究—軋轢の基礎調査と軋轢緩和における住民参加型調査の可能性—」



活動地へおじゃまします! 台湾・溪洲部落を訪ねて

# 国境や世代を超えてつながる 住民主体のコミュニティ活動

●利根英夫（トヨタ財団プログラムオフィサー）

溪洲部落の家

【訪問地】  
台湾台北県新北市  
溪洲部落

【助成題目】  
自立共融的居住文化の継承と  
再創造——台湾原住民参加に  
よる部落集住計画・育成ネッ  
トワーキング



溪洲部落の集落入口にあるゲート

台北郊外のある小さな集落に、大きな変化が起きています。その変化は、集落の住民と深く関わっていくことになったある日本人と、日本と台湾にいる彼の仲間たちが、住民自身の力を引き出し、10年を超える時間のなかで導き出されてきたものです。

日本と台湾をつないで生まれたその変化のプロセスが、いまインドネシアにつながり、さらに諸国に広がっていく端緒になりつつあります。人の縁から始まり、国境と歳月を超えて結びつく2つのプロジェクトの現場のひとつを訪ねました。

## 阿美族が暮らす台北近郊の集落

台北県新北市にある溪洲部落は、台湾北部を流れる淡水河の支流・新店溪の川沿いに築かれたコミュニティです。周辺に公共交通は整備されておらず、最寄りの駅からは徒歩で30分ほどかかります。

台湾には、16民族、50万を超える原住民がおり、台湾社会の2%ほどを占めます。歴史的に色濃い偏見や差別を受けてきた彼らは、80年代には権利回復運動を展開し、彼ら自身が「原住民」という呼称を勝ち取りました。

溪洲部落に暮らすのは、その原住民のなかで最も人数が多い阿美(アミ)族の35世帯ほど。阿美族の多くは台湾東部の花蓮県等に暮らしてきましたが、建設労働等に従事して台北の発展を支え、一部の人はそのまま台北に暮らすことを選びました。ただし、彼らが暮らさざるを得なかったのは、その大都市の周縁部。行政側から見れば公有地に

「勝手に住み着いた人たち」でした。周囲の開発等に伴い、いくつかの原住民コミュニティが強制的に排除されていくなか、川沿いの土地を公園等に整備する動きが起こり、この溪洲部落にも排除の圧力がかかっていました。

そのような状況にあったこのコミュニティに、ある人が関わることになりました。建築家であり、大学の教員であり、NPO「まちの縁側育くみ隊」の創設者でもある故・延藤安弘氏でした。

## 延藤安弘氏の取り組みと、そこからつながる縁

延藤氏については、多大な業績のある研究者として、あるいはまちづくりや地域づくりに関わるNPOの先駆者として、ご存知の方も多いでしょう。神戸や東日本の震災復興における地域コミュニティの活動についても精力的に活動されただけでなく、ワークショップの方法論や実践等の面では、建築やまちづくりといったテーマを超えた市民活動にも大きな影響を与えてきました。本誌25号「私のまなざし」で触れられているブルガリアの絵本創作ワークショップも、延藤氏が深く関わったものであり、その活動の幅広さと知見の大きさを、ひとつの枠に留めるのは不可能です。



当時の住民運動(右)やワークショップの様子は今も集落に掲示されている

台湾大学の客員教授として学生の指導をするなかで、溪洲部落に縁を得た延藤氏は、彼らの居住文化に惚れ込み、以後関わりを深めていきました。そんな折、トヨタ財団は延藤氏への助成を行います。2009年のことでした。そのプロジェクトの目的は、「住民と大学、住民と住民、



建築中の新しい住居(写真提供:太田裕通氏)

住民と行政の信頼と協働に基づく  
原住民居住コミュニティの継承と  
再創造を、典型事例において住民  
主体の設計、建設、管理の全過程  
で成功させ」ることでした。助成  
により住宅の間取り等ハード面の  
調査と、コミュニティ内の関係と  
いうソフト面でのリサーチが行わ  
れ、台北県政府に対する住民参加  
による再建設計画の立案が推進さ  
れました。

住民自身はどのようなコミュニ  
ティを作っていくのか? 延藤氏と仲間たちが外部ファシリテ  
ーターとなり、ワークショップ等を通じて溪洲部落内の合意形成を図っ  
ていきました。また、行政との交渉の場も作り、両者の合意も形成  
されていきました。周辺の再開発と住民の居住地、さらには住居デザ  
インといった具体的かつ詳細な面に及ぶそのプロセスは、助成プロ  
ジェクトを超えて何年もかかります。助成から10年を経たいま、現在  
の居住地のすぐ隣の公有地に新たな住居が建設されており、来年には  
全住民がそこに移る予定です。延藤氏が育んできた台北の小さなコ  
ミュニティでの住民主体の活動が、彼を台湾につないださまざまな縁  
と相互信頼の基盤に乗って、ゆっくりと、しかし目に見える大きな変  
化となって現実立ち現れてきているのです。

## 時と場所を超える共通性

トヨタ財団は「アジアの共通課題と相互交流」を掲げる国際助成プ  
ログラムで、溪洲部落に再び関わりを持つことになりました。台北で  
実現したこの集落の経験を、インドネシアのジャカルタの「カンポン・  
アクアリウム」とつなげる試みです。「カンポン・アクアリウム」はか  
つてジャカルタ北部の湾岸にあった、約700人が暮らしていたコ  
ミュニティです。2016年に州政府の観光地整備計画のもと強制的  
に取り壊されました。しかし、一部の住民は都市計画プランナーや法

律家等と協力し、また周辺国の関係者とも関係を築いて、バラバラになつてしまった同コミュニティの再建を目指しています。

このプロジェクトの中心となっているのは、溪洲部落の再創造プロジェクトに深く関わってきた台北の人々と、延藤氏の「かばん持ち」とし



①小学校時代に日本語で教育を受けたおじいさん。②ジャカルタに住んでいたことがあるというおじいさん(右から二人目)に話を聞いた。③深夜まで続いた延藤氏を偲ぶ会。④偲ぶ会で振る舞われた阿美族の料理

て学生時代から同地に関わり続けてきた名畑恵氏、そして溪洲部落に驚くほど似た環境と経緯を持つジャカルタの「カンポン・アクアリウム」に関わる人々です。3者を知る京都大学の神吉紀世子教授がこれらをつなぎ、学生を含めて共に知見を共有していきます。

溪洲部落の長老的存在の男性から、阿美族の祖先はインドネシアにも近いカリン諸島から来たそうだよ、と日本語で教えられました。小学校低学年のときは、日本語で教育を受けていたそうで、今でも日常会話に支障はありません。また、阿美族の言葉はインドネシア語との共通性が多く見られるそうです。日本とインドネシア双方との歴史的・文化的な大きなつながりを感じます。溪洲部落の人々は、ジャカルタの「カンポン・アクアリウム」の写真を見て、その住環境の共通性にも驚きの声を上げました。

### 溪洲部落からの学び

溪洲部落で起きていることから、環境が異なる他国・他地域が学び取れることは何でしょうか。それは住民参加と行政との合意形成のプロセスと、住民自身の責任だと感じました。不平不満を言うだけでなく、自らが暮らす地域はどうあるべきか、どう変えたいかを考え、自らが動き、その結果も引き受けていく姿勢とも言えます。

延藤氏は2018年に亡くなり、溪洲部落の変化や、さらにその先の拡がりを目にするには叶いませんでした。しかし、地域の人々を含むプロジェクト関係者のなかには、その遺志と意思が確かに根付いています。

訪問した7月下旬のある晩は、故・延藤氏を偲ぶ夕べとなりました。かつてワークショップ等が行われた集会場の前に椅子が並べられ、模造紙を貼った壁に延藤氏のこれまでの活動が映し出されるなかで、住民と故人とのエピソードが次々と語られました。阿美族の料理に舌鼓を打ちながら、これまでとこれからを賑やかに語り合うその場には、延藤氏が遺したものが確かに息づいていました。

各地の人々と地域に新たな変化をもたらす、国境や世代を超えるつながり、それを生み出す場と、その努力を中長期的にサポートすることの重要性を再認識した台北訪問でした。

## 私たちの取り組み——助成対象者からの寄稿

メキシコの日系移民四世五世のアイデンティティ探しの旅について、2017年度研究助成プログラムの助成対象者である平井伸治さんからご寄稿いただきました。日本政府は今後5年で約34万人の外国人労働者を受け入れる方針を打ち出しています。2〜3年のつもりが永住になる方もでてくるかもしれません。日系メキシコ人の「今」は、100年後の〇〇系日本人の姿かもしれない——。日本社会の未来にも示唆を与えてくれる記事です。



2017年度研究助成プログラム「共同研究助成」  
「助成題目」メキシコ東北地方における日本人移民の歴史の調査・保存と継承を目指すコミュニティ参加型プロジェクト

## 日系メキシコ人と共に行う 歴史調査・保存・伝承の実践

◎平井伸治  
メキシコ社会人類学高等研究所 (CIESAS)・東北キャンパス教授

### 日本人移民と失われていく日本との絆

20世紀初頭、1万人以上の日本人が契約移民としてメキシコに渡った。鉱山開発、鉄道建設、プランテーションで安価な労働力として働くために、海外出稼ぎを斡旋していた移民会社が、全国の農村から主に10代、20代の男性を中心に募集した。彼らの契約期間は2年から4年であったが、殆どが本帰国することとはなかった。

メキシコで彼らを待ち受けていたのは劣悪な労働条件で、数年で故郷に錦を飾るとい

出発前に思い描いた夢とは程遠いものであった。1910年にメキシコ革命が勃発すると、多くの日本人は失業し、すでに商売を始めていた者は、動乱に巻き込まれ全財産を失った。また、革命軍に兵士として参戦した日本人もいた。

メキシコの東北地方に渡った日本人の多くは、メキシコ人女性と結婚し家庭を築き、革命の動乱が治まると、農園、商店、飲食業、製造業などさまざまな分野で事業を起し、商才を発揮して経済的に大成した者もいた。1930年代は日本人移民が経済的に安



モンテレイで天皇陛下の誕生を祝う日本人移民とその家族(1934年)

定期を迎えた時代で、日本人とメキシコ人の妻、そして混血の子どもたちから構成されるコミュニティが各地域で形成された。メキシコ社会への統合が進む一方で、天皇誕生日や結婚式を日本人の家族や友人で祝い、日本への仕送りや手紙の送付、家族や同郷の仲間への呼び寄せといった形で、日本とのつながり

も同時に維持していった。

しかし、1941年12月の日米開戦以降、在墨邦人は再び厳しい時代を生きることとなった。メキシコがアメリカの同盟国であったため、メキシコ政府は敵国民となった日本人移民に対して、内陸部への強制移住、財産没収、手紙の検閲などの措置をとった。終戦後、収容先の大都市に多くの邦人が残った一方で、元々住んでいた地方の居住地に戻った者もいた。しかし、すでに中高年になっていた彼らにとって、家族と再会し、貧困から再び立ち直ることは、非常に困難なものであった。

また、戦時中から戦後1950年代ごろまで、日本人とその子どもたちが激しい人種差別を受けていたため、移民一世たちは、自分の子どもや孫たちに日本語や日本の習慣を教えることも控えるようになった。そして、日本人コミュニティと日本との社会・文化的つながりは、移民一世が高齢化し、亡くなる

と、急速に弱体化していった。

### ..... コミュニティ参加型プロジェクトの始まり

筆者は2009年からモンテレイで暮らすなかで、日系人の高齢者、中高齢や若者と交流するようになった。そして、一世が残した日本語で書かれた資料を翻訳したり、ルーツ探しを手伝って欲しいと依頼されることがあった。筆者が文献調査をするなかで分かった情報を日系人に説明し、彼らが新たに家庭で見つけた日本語の資料をスペイン語に訳すことで、長い間謎であった一世のライフヒス

トリーが少しずつ明確になっていった。

このように日系人のルーツ探しを手伝うなかで、資料の収集、分析などを日系人と一緒に進めていく共同作業のプロセスが、彼らのアイデンティティと自尊心をポジティブに変えていくことを実感し、人を感動させながら歴史研究、市民参加型の知識の構築をするための共同研究ができないか模索した。そして、もっと多くの時間を調査に費やせるようになるために、日系人のルーツ探しを共同研究プロジェクトとして勤務する研究所と東北部日墨協会に2015年8月に提案した。

当初集まったのは、主にモンテレイに住む日系二世から五世の日系人15人(9家族)で、18歳から71歳と幅広い年齢層であった。プロジェクトの目的は、日系人が自ら一世のライフヒストリーと家族史を調査・保存・伝承をすることであった。具体的な活動は、まずメキシコの日本人移民史の概略と基本的な調査方法についての集中講座を実施する。そして、日系人一世のライフヒストリーと家族史を調査し、バーチャル・ミュージアムを製作して、調査の成果を保存・伝承していくことであった。

同年9月に日系人を対象に集中講座を開始した。この講座は彼らを調査員として育成するための研修期間であるため、移民史の概略を説明するだけでなく、宿題やグループディスカッションで、家庭での資料の収集や家系図と家族史のタイムラインを作成する実習も行った。2017年11月には、集中講義を再び行い、4名の日系二世、三世を第二期生と

して育成した。

### ..... プロジェクトの拡大

当初、研究プロジェクトは活動資金がほぼない状態で運営していたため、活動範囲が筆者とメンバーの大半が住むモンテレイに限定されており、またバーチャル・ミュージアムの母体となるホームページの作成もあまり進んでいなかった。よって、トヨタ財団の研究助成を申請する際に、①文化人類学、歴史学、人文地理学やビジュアルアーツなどの複数の分野の専門家と日系人から構成された研究チームの結成、②調査を行える地域の拡大、③別の州の日系人を対象に集中講座や講演、ワークショップを実施、④バーチャル・ミュージアムの本格的な制作、⑤メキシコ国内の他の地域でも応用可能な移民史の調査・保存・伝承の方法論の提案を目指した。

2018年春にトヨタ財団研究助成プログラムに採用されてから、さまざまな活動を行ってきた。



古い写真の保存方法の実習

モンテレイでは、第3期生育成の集中講座を実施し、さらに集中講座修了者を対象に定期的な勉強会を開き、海外の日系社会で行われた歴史保存

の実践を検討し、調査方法や映像資料制作のワークショップも行った。同年6月には、サンルイスポトシ州の日系人協会と共同で集中講座を行った。

また、20世紀初頭に4千人以上の契約移民が送り込まれたコアウイラ州の炭鉱に囲まれた集落で、昨年からモンテレイの研究チームのメンバーと共にフィールドワークを行い、その地域に暮らす日系人を対象に移民史の講演や家系図の作成のワークショップを行った。



実際に制作されたバーチャル・ミュージアムのページ

ファミリーギャラリーが設けられており、日系人が作成した家系図、一世のライフヒストリーと家族史のタイムラインが展示され、また日系人が親族と共同で集めたさまざまな資料や作成した映像資料なども閲覧できるものに仕上がった。

バーチャル・ミュージアムを製作する上で、特にこだわったのは、本プロジェクトの全体を特徴づける「レブリカビリティ(経験の移転可能性)」という概念である。簡単に言うと、他の人に真似できない唯一の作品を作るのではなく、他の地域で他の団体が応用できるようなモデルを提案することを目指して行った。



岐阜県郡上市美並町でメキシコと日本の親戚の面会(上)。沖縄で親族に会えた日系五世の若者

よって、基本的には無料ツールや低料金金でも入手しやすい機材を使用することを一貫して行った。

### ..... ルーツに辿り着くことで見えてきたもの

今年7月24日に行ったシンポジウム(23ページ上写真)では、集中講座を終了し、これまで調査を行ってきた日系人のうち7名が筆者と来日し、調査の中間報告を行った。

そして、一世の故郷でフィールドワークを行うため、沖縄、福岡、山口、三重、岐阜、富山を訪問した。日系人以外に、通訳兼コー

デイネーターとして現地での活動をサポートできる者が同行し、郷土史や一世の親族に関する情報収集をしたり、故郷の親族との面会を実現するうえで、さまざまな団体から協力を得られる体制を準備した。

滞在期間は3日から6日間であったが、全員が予想以上の成果を挙げる事ができた。ほぼ全員日本の親戚と会い、交流し、日本側の親族の家系図や郷土史など、メキシコでは知りえなかった情報を収集できた。また、先祖の墓参りをしたり、故郷の夏祭りに参加できた日系人、先祖の生まれ育った集落の住民に歓迎会を開いてもらったメンバーもいた。

本プロジェクト終了まであと8か月。ルーツ探しの意義やそのインパクトについて、今回の旅に参加した日系人としっかり議論し、他の日系人が日本との絆を再構築しようとする際に役立つ旅のモデルプランやエコシステムも提案したい。

# 盆踊りをつないでいくためのヒント

●加賀道(トヨタ財団リサーチフェロー)



鳴子のこけし輪投げ

ターン後、独自にさまざまな新規イベントを開催してきましたが、地域に根差したお祭りにかかわることは、それよりも意味のある事ではないか、世代交代の良い機会ではないかと考え、残された1か月でできることを楽しもうと前向きに取り組むことにしました。

そこからなんと5名の同世代の仲間を確保。しかし、そのほとんどが、事前準備だけ、または、当日だけなら手伝えるという人達でした。働き盛りの世代なので当然です。時間や労力をなるべくかけずに楽しい盆踊りにすること、子どもたちが楽しめるお祭りになることを心掛けました。

たとえば、①定着している抽選会は継続しつつ、テーマを「地元を知ろう」とし、わざわざ遠くのホームセンター等で購入していた景品を、地域内の旅館や商店などから購入することにしました。趣旨説明に旅館や商店を回ることで、企画者である私たちも地域を知



地元色満載の景品が集まりました！

お祭りはあいにくの雨にも関わらず盛況でした。もちろん、へテラン勢には例年同様に活躍してもらい、それぞれ「できること」「使える時間」をつなぎ合わせた新しい形の盆踊りとなりました。



当日の盆踊り

地元である宮城県鳴子温泉で在宅勤務をしている私は、ひよんなことから盆踊りの企画運営にかかわることになりました。何かお手伝いでもと軽い気持ちで参加した盆踊りの会議で「今年は若い人達に企画運営をお願いしたい」と振られ、参加者の視線が一斉に私に集まりました(アラフォーの私が唯一の「若者」でした……)。他にもいろいろな「仕事」を抱えていた私は、これを引き受けたら大変なことになると躊躇したものの、へテラン勢の「なんでも手伝うから」との力強い声に押され、引き受けることになったのです。

お祭りの運営主体はここ30年ほど変わらぬ顔ぶれで、ほとんどが60〜70代になり、ここ数年は参加者も減り、寂しさを隠せなくなっていました。始めは渋々引き受けた私でしたが、ふと、幼少期にお祭りを通じてたくさんの経験や楽しい思い出ももったことを思い出しました。U

# トヨタ財団 ジャーナル October 2019



## MESSAGE

公益財団法人トヨタ財団  
理事長着任のごあいさつ



Haneda Masashi  
羽田 正

1) の度、トヨタ財団理事長に就任いたしました。数々の要職を歴任され、それぞれの場で素晴らしい実績を挙げていらっしゃる遠山敦子前理事長の後を継ぐことになりました。遠山前理事長は卓越した指導者であると同時にすぐれた人格者であり、その後任ということで、光栄であると同時に、身の引き締まる思いです。

私は、東京大学で大学執行役・副学長を務めています。歴史学者が本業です。現在

は、30年後の世界を見据えた世界史の枠組み、解釈と叙述はどうあるべきかという課題に取り組んでいます。歴史学者の仕事は過去を明らかにすることではないのかと訝しく思われるかもしれませんが、「未来」が私の研究テーマです。人間社会の変化に伴って、人々が求める過去についての知識も変わって行きます。私は30年後の人々が地球の住民として必要とするだろう世界の歴史を、今から考え、生み出し、育てて行きたいのです。言わば、次世代のための世界史の研究です。

トヨタ財団の設立趣意書には、世界的視野に立ち、長期的に幅広く社会活動に寄与すること、時代の要請に対応した課題を取り上げ、その研究と事業に対して助成を行うことがうたわれています。この方針に従って、財団は、1974年の設立当初から、国際性、市民性、先見性という3つの理念を掲げ、特色ある助成事業を行ってきました。振り返ってみると、東南アジア諸国を対象とする国際的な助成、まだ播磨期にあったNPOへの助成などは、日本社会の国際化、市民セクターの台頭を予見して生み出されたことに意義深い企画だったと思います。これまでの財団の活動は、現在の私の研究における取り組み、すなわち未来を構想することを、社会的実践の場です。これに実現していたともいえるでしょう。

今後は理事長として、財団の理念とこれまでの実績を大切にしながら、30年後の地球と人類社会にとって有益な、未来のた

## REPORT

めの助成活動をさらに積極的に展開してゆきたいと考えています。皆様方の力強いご支援とご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。



【国際助成プログラム】  
シンガポールで開催されたAVPN  
コンファレンス2019に参加

A V a N (Asian Venture Philanthropy Network)は、シンガポールに本部を持ち、30か国以上から550社が加盟する社会的投資や戦略的フィランソピーを實踐する財団・企業・中間支援組織・大学等のネットワーク組織です。今年6月にシンガポールにおいて「Breaking Boundaries - Moving capital towards impact」というテーマで4日間にわたり開催されたA



右写真は分科会で行われた模造紙を使ったワークショップの様子。左写真はDeal Share Liveで起業家が協力者を募るプレゼンの様子

ました。Deal Share Liveといわれるセッションでは、事業実施団体がピッチ的なプレゼンを行い、その場で協力者を募るといったイベントも行われました。

伝統的なフィランソピーでは収益の一部

名付けられ、この夏に完成しました。土井氏からは物件の取得から改修を実際に行うまで、初めての経験であった為に予定以上の時間を要したとお聞きしました。

## あ

「さひや」はインターンとして長島町外から訪れる高校生が宿泊できる施設になっていきますが、地域の人たちと交流ができるようなコミュニケーションスペースとしても活用できるように、地域の人たちが入りやすい空間設計になっています。レストランも併設されており、シェフ兼管理人として働いているのがプロジェクトメンバーの甲斐友也氏。「あさひや」を、ただ単にお金を払って食事や宿泊ができる場所ではなく、長島町の「食」を使って食事を提供し、地域の人たちを巻き込んで、長島町の人も町外の人たちも交流が深められる場所にしたいと甲斐さんは考えています。



古民家を改修した宿泊施設「あさひや」

「あさひや」の改修工事が終了し、宿泊施設が必要となる中長期型のインターン受け入れが可能になりました。今後は「長島大陸留学プログラム」のインターン受け入れに拍車がかかり、さらに充実した活動になっていくのではないかと期待しています。

(比田井)

VPNコンファレンス2019は、世界43か国から1300名以上の関係者が参加、日本からも30名以上が参加しました。

## 全

体合と分科会を合わせて約85のセッションが開催され、ロックフェラー財団などの分野でのリーディング組織からの講演、「気候変動」、「教育」、「栄養」等の課題別セッション、また最近の潮流である「ソーシヤルインパクトマネジメント」をとりあげたセッションも多く行われ

を本業とは別のチャリティー活動等へ寄付(再配分)するなどの形が主でしたが、新しい形のフィランソピーは、本業そのものを通じて社会によりインパクトのあるビジネスに投資してリターンを受けると同時に社会にもよい影響を与えることを狙う(社会的投資)等、伝統的フィランソピーと比べ、より直接的で結果重視のアプローチをとる傾向があります。

(沖山)



【国内助成プログラム】  
「高校のない町で高校生が学ぶ」  
鹿児島県長島町を訪問

2019年7月中旬に、国内助成プログラム「そだてる助成」の枠組みで助成中のプロジェクト「高校のない長島町で高校生が学ぶ仕組みづくり」長島大陸Nセンターで行う全国の高校生と事業者の交流促進(代

# INFORMATION

## 特定課題「外国人材の受け入れと日本社会」の公募期間中です

外国人を本格的に受け入れることは日本の社会・経済にとって長期・超長期にわたる大きな変革であり、影響は極めて大きいといえます。そこで、トヨタ財団は2019年度より、①外国人材が能力を最大限発揮できる環境作り、②外国人材の情報へのアクセスにおける格差の是正、③ケア・サポート体制を担う人材と既存資源の見直し、④高度人材の流入促進、⑤日本企業の海外事業活動における知見・経験からの学びと教訓という5つの課題を設定し、外国人受け入れの総合的な仕組み構築への寄与が期待できる調査・研究・実践活動に対して助成を行います。詳細はウェブサイトをご覧ください。

### 「公募期間」

2019年10月1日(火)～11月30日(土)

## 特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」の公募期間中です

2018年度より「特定課題」先端技術と共創する新たな人間社会」を設けました。AIやIoT、ビッグデータ、ロボット、

表・土井隆氏)の活動地であります鹿児島県長島町を訪問しました。

長島町では高等教育機関が町内に無くなってしまったこと、そして人口が約1万人の街で、漁業・農業の売り上げがそれぞれ100億円以上あるにも関わらず、次世代の職の担い手がいない事が人口減少に関連する課題としてあがっています。そんな中、代表の土井氏をはじめとするプロジェクトメンバーが長島町で長島大陸留学(インターン)プログラムや、古民家(元旅館)の改修を行う事によって、人口減少や漁業・農業を中心とした生産者の課題解決を目指しています。

## 長

島大陸留学プログラムは、プロジェクトメンバーの白鳥薫氏が担当。長島町外からの高校生を職業体験型のインターンとして受け入れ、コワーキングネットを行い、長島町でどのような学びや体験をしようかのプログラムを設計しています。2年間の助成期間のうち1年が経過したこともあり、助成開始時よりも地域の子どもたちとの接点が増え、定期的なイベントが開催できるようになったと白鳥氏が説明してくれました。

また、古民家の改修物件は「あさひや」と



各地の高校生がインターンとして長島町を訪れていました

ブロックチェーンなど、先端的な科学技術をめぐる社会的諸課題に対応する研究プロジェクトが対象となります。詳細はウェブサイトをご覧ください。

### 「公募期間」

2019年10月7日(月)～12月6日(金)

# PUBLICATIONS

内助成プログラムにて助成させていた「だいたプロジェクト」の成果報告書を作成いたしました。

今回の報告書に掲載したのは、2015年度(昨年の成果報告書に未掲載のプロジェクト)、2016年度「活動助成」、2017年度「しらべる助成」、「発信・提言」のプロジェクトです。

今後の国内助成プログラムへのご応募をお考えの皆様にも参考になると思いますので、是非一読ください。





無数のランタンに出会える台北天后宮 (P.20参照)。[H.T.]

[編集後記]  
LAST WORD

● 10月よりトヨタ財団では新たな助成プログラム「外国人材の受け入れと日本社会」をスタートさせた。これは、今年4月の改正出入国管理法によって今後5年間で約34万人の外国人材を受け入れる方針が打ち出されたことに合わせ、喫緊の諸課題に関する調査・研究・実践活動に対して助成しようというもの。考えてみれば、既に日本は在留外国人約273万人内、就労者146万人という多文化国家である。

先日のラグビーワールドカップ初戦の対ロシア戦において、松島幸太郎選手(南アフリカ生まれ、父親はジンバブエ人)の快走に一生懸命声援を送った私のような俄かラグビーファンも多かったと思うが、ラグビーの日本代表チームにいたっては、代表選手31名の内、海外出身者は6か国15名にのぼる多文化チームだ。彼らは、母国の代表となるよりも日本を選び、日本のために、日本を背負って戦ってくれた。そして、試合が終わればノースサイド。そこには、互いに相手や仲間をリスペクトするラグビー精神がある。国籍や出身地など小さな問題でしかない。「ロシア戦勝利の興奮冷めやらぬままM.O.」

● 6月からトヨタ財団に仲間入りしました。5年ほど前にNGOで広報を担当していたときは毎日のように原稿や企画に追われていたので、本誌の企画に参加して久しぶりに広報物と向き合いました。NGO時代は団体の活動とその背景にある食料問題を伝えるべく、取材・執筆を進めていたのですが、「JOINT」は毎号テーマがダイナミックに変わることに加えて情報提供者は助成対象者をはじめとする現場の第一線で活躍する方々。その違いが新鮮でした。と同時に、トヨタ財団がたくさんの助成対象者や研究者、実践者のみなさまを通じて、実に多様な社会課題に向き合わせていただいていることを実感しました。

[AK]

● ● ● 久しぶりに「おじゃまします」を書きまし

た。台北では西門という繁華街を拠点にしました。原宿のような街です。タピオカドリンクを売る路店には若者が列を作り(東京ほどではないにしても)、観光客が闊歩しています。インスタ映えを意識して、時折止まっては自撮り棒を取り出し、ポーキングにも余念がありません。

● ● ● ● 新元号令和になってからはじめての「JOINT」です!新しい時代も社会の課題を先取りした特集をお届けしたいと思いますので、ご期待ください。

後日、今回の特集鼎談の拡大版をウェブサイトに掲載いたしますのでぜひご覧ください。[N]

FOR THE SAKE OF GREATER HUMAN HAPPINESS



ご意見・ご感想、また本誌送付先の変更等がありましたら、トヨタ財団ウェブサイト、あるいは同封のハガキにてご連絡いただくと幸いです。

JOINT [ジョイント] No.31

発行日 2019年10月25日  
発行人 山本晃宏  
編集 トヨタ財団 広報グループ

発行所 公益財団法人 トヨタ財団  
〒163-0437東京都新宿区西新宿2-1-1  
新宿三井ビル37階  
[TEL] 03-3344-1701  
[FAX] 03-3342-6911  
[URL] <https://www.toyotafound.or.jp/>

編集協力 石井 泉  
デザイン エディション・ヌース  
印刷 文唱堂印刷

本誌掲載の記事、写真、イラスト等の無断転載を禁じます。



On The Journey  
—旅の途上で—

お祭りで企画したスーパースクール(本誌P.26参照)  
● 写真撮影: 加賀 道





公益財団法人

トヨタ財団

THE TOYOTA FOUNDATION



公益財団法人トヨタ財団ウェブサイト  
<https://www.toyotafound.or.jp/>



UD  
FONT

